

令和五年一月十日発行
皇學館論叢第五十五卷第四号
抜刷

平安朝後期記録に現れたる「釈奠詩題」を論じて
「七経輪転」「行事曆注」に及ぶ

臺

藏

明

平安朝後期記録に現れたる「釈奠詩題」を論じて

「七経輪転」「行事曆注」に及ぶ

臺 藏 明

□ 要 旨

平安朝後期(治暦四年(建久六年))の記録に現れる釈奠記事には、講経を記すものがあり、その中には「釈奠詩題」をも記すものがあり、その両者共に「七経輪転」を研究する際に、重要な手懸りを提供する。しかし前稿を含めて、既発表の論考には、見落しや誤記があり、その全体を把握するには聊か心許無いものがある。本稿では、史料の抄出から始めて既発表論考の採択状況を表示し、彼我補完を合ひ新に追補し、『大日本史料』の指摘をも加へて全体を掴むことに努めた。

その結果を利用し、前稿同様「七経輪転」の実態を、年表々示にして明らかにした。それは前稿と殆んど差異の無いものであるが、「釈奠詩題」を填補した分、前稿を補強することが出来た部分もある。また前稿で院政時代の慣例と述べたことが、「行事曆注」に依るものであることが実例調査で判明し、前稿の信頼度も高まり、実態調査には力強い応援事項となつた。

前稿以降の論考を振り返つてみると、「七経輪転」が學術用語として使用され、一気に拡まり定着して行く過程に、前稿が関わり与つて一翼を担つてゐることが知られた。本稿が前稿と共に、釈奠の実態調査に裨益する所あるならば、筆者深く喜びとする所である。

□ キーワード

釈奠 釈奠詩題 七経輪転 行事曆注 七経

はしがき

平安後期（治暦四年
建久六年）の記録を見てみると、積奠講経記事と共に積奠詩題をも記すものが散見するのに出会ふ。それは、積奠に於ける七経輪転を考察する上で、重要な手懸りを提供するものである。筆者は以前本誌に、「平安朝積奠に於ける『七経輪転』の一考察」（八の四、昭和五十年、以下前稿と称する。）を發表し、そのことを指摘し事例を表示して置いた。所がその後、見落しや誤記に気付き、覚書にしてまとめ筐底に秘して来た。

然るに、昭和六十年福田俊昭氏が「平安朝の積奠詩」（『日本文学研究』二二四）、平成二年翠川文字氏が「積奠(1)前期積奠年表」（『川村短期大学
研究紀要』十）を發表され、筆者と同様の事例を得られ、両者を一瞥した際「しまった、してやられたか。」とヒヤリとした。しかし仔細に見ると、三者間に幾らかの出入りがあり、必ずしも満足な結論に到達することを、期待し得ないけれども、その故にこの試みを放棄すべきではない、管見の限り関連論考の發表を見てゐないことから、昨今流行りの情報共有の必要を覚へ、本稿作成の契機となつた。只、不肖私の如きが之に関して何事か述べようといふのは、おほげなきことの極みであるが、前稿の補訂を兼て鄙見を開陳し、識者の御批正を賜はりたいと思ふ。

一、積奠詩題

積奠詩題とは、積奠の宴座に於いて、上卿の宣を奉じて文章博士が献ずる題のことで、その時の積奠都堂論義に用ゐられた経書の中から、或文辞を撰び出して詩題とするのである。次いでその題に随つて、積奠参加の官人文人に依

る賦詩が行はれ、穩座に於いて詩が披講されるのである。このことを関根正直氏は「『題をいだす』は孝経札記等の書中にある語を扱ひ、詩題として上卿に献じ、上卿より列席の王卿等に示し、さて作れる詩を穩座に移りて後、披講するなり。」〔修正公事根源新釈〕上、八七頁〔2〕と述べられてゐる。即ち、都堂論義に用ゐられた經書と詩題の出典とは同一といふことである。

詩題に就いて言へば、詩文集にも釈奠詩題が記録されてゐるが、それらは明確な成立年月日が判明する例が少なく、比して記録に記されてゐる詩題は年月日が明確なのである。

○史料

- このことを踏まへて、後考に便ならしめる為、対象となる史料を煩瑣を厭はずに抄出しよう〔が詩題部分〕。
- (1) 八月一日丁未。釋奠。講三周易二題。聖人養賢。〔寛弘七、八、一、日〕
〔本紀略〕二、二二頁
 - (2) 一日丁亥、〔中〕釋奠〔中〕題云、比德於玉、禮、〔下〕〔承保三、二、一、略〕〔水左記〕三七頁
 - (3) 四日丁亥、今日釋奠也、〔中〕題云、四方來賀、詩、〔下〕〔同三、八、四、略〕〔同書〕三八頁
 - (4) 二日、釋奠也、題云、上下順、〔周易第一、云々〕〔略〕〔下〕〔承歴二、二、二、同書〕二二頁
 - (5) 七日丁酉、〔中〕今日釋奠祭也、〔中〕題云、德洽民心、〔尚書〕〔略〕〔下〕〔同四、八、七、同書〕一〇六頁
 - (6) 八日丁亥。釋奠。〔中〕題云。野無遺賢。〔尚書〕〔寛治元、八、八、本朝世紀〕二七九頁
 - (7) 十四日卯丁大學寮釋奠、〔中〕題云、天地養萬物、〔周易〕〔同六、二、一四、中右記〕一、七二頁
 - (8) 八日丁釋奠也、〔中〕講書、〔尚書〕〔略〕〔中〕題云、俊乂在官、〔略〕〔下〕〔同八、八、八、同書〕一、七二頁
 - (9) 十四日〔中〕今日釋奠〔中〕講經、〔周易〕〔略〕〔中〕出題、大有慶〔略〕〔下〕〔嘉保三、八、一四、同書〕二、二八〇頁

平安朝後期記録に現れたる「釈奠詩題」を論じて「七経輪転」「行事曆注」に及ぶ〔臺藏〕

- (10) 六日卯丁(略中) 今日又釋奠也、(略中) 題左傳賓有禮序、秀才有元、(永長元、二、六、同書一、三三〇頁)
- (11) 八日、釋奠(略中) 題平秩東作、(尚書。略下) (承德二、二、八、同書二、七七頁)
- (12) 二日、釋奠(略中) 題、論語云以道事君(略下) (同二、八、二、同書二、九八頁)
- (13) 十日丁巳。釋奠。(略中) 獸題。(聽講古。康和五、八、一〇、文孝經。本朝世紀一三三七頁)
- (14) 十日丁卯厭日也(略中) 釋奠(略中) 題聽講(孝經。略下) (嘉承二、二、一〇、一、中右記三、一八五頁)
- (15) 十日(略中) 釋奠(略中) 講尚(略中) 予取題文(略中) 上下治(略下) (同仁元、八、一〇、同書三、三七八頁)
- (16) 一日、丁酉(略中) 釋奠云々、題云、聽講孝經者、(略下) (天永元、八、一、一、殿曆三、一〇二頁)
- (17) 十七日丁未(略中) 今日釋奠也、(略中) 座主講毛詩(略中) 予仰云題(略中) 庶民子來(略下) (同二、八、一七、中右記四、六八頁)
- (18) 十日(略中) 今日釋奠也(略中) 博士登高座講論、(略中) 予仰云題(略中) 鳳凰來儀(略下) (同三、二、一〇、同書四、二二九頁)
- (19) 五日丁卯(略中) 今日釋奠(略中) 題云、貴德(元永元、二、五、同書而尚齒。下略) (五、史料大成本、二七頁)
- 五日、丁卯(略中) 今日釋奠(略中) 禮記、題云、貴德而尚齒、(下略) (同、元、二、五、同書、大日本史料本、三の一九、一八三頁)
- (20) 七日(略中) 釋奠也(略中) 獻詩題云、思賢材(略下) (同元、八、七、同書五、史料大成本、六八頁)
- 七日(略中) 釋奠也(略中) 獻詩、毛詩、題云、思賢材(略下) (同元、八、七、同書、大日本史料本、三の二十、一〇二頁)
- (21) 六日丁丑(略中) 釋奠(略中) 聽講周易、賦詩仁以行之云々(略下) (保安元、二、六、同書五、二〇二頁)
- (22) 九日(略中) 今日釋奠(略中) 左傳題云、養民如子者、(同元、八、九、同書五、二四七頁)
- (23) 一日丁酉(略中) 今日釋奠(略中) 講尚書政在養民云々、(大治元、二、一、同書一、一九三頁)

- (24) 七日丁丑釋奠、講書周易、題照明德(略)(下同五、八、七、『中右記』六、二八頁)
- (25) 十五日丁丑坎日(略)今別□釋奠也(略)講書、禮記、(略)出題、數學和例云々(略)(長承元、二、一五、同書六、二八五頁)
- (26) 朔日丁亥釋奠也(略)講書尙書、題云、五典克從(略)(同二、二、朔、同書七、二〇頁)
- (27) 五日丁亥(略)今日釋奠也(略)論語、文題、遠者來(略)(同二、八、五、同書七、五九頁)
- (28) 七日丁亥(略)今日釋奠、講書、周易、題云、上下應之(略)(同三、二、七、同書七、七六頁)
- (29) 六日丁酉。今日釋奠也。(略)有二宴座講書。論語。題云。礼以行之。久安三、八、六、本。朝世紀。五六二頁
- (30) 六日丁未。天晴。釋奠也。(略)講三言論語一。(略)獻三詩題一。困子懷。仁平元、二、六、同書、七五四頁
- (31) 十日丁丑。(略)今日。釋奠也。(略)講書周易也。(略)題云。上而尚賢々(略)(同元、八、一〇、同書七、八二頁)
- (32) 二日丁卯。(略)釋奠也。(略)講書左傳也。(略)題云。敏而事レ君。(略)(同二、二、二、同書、八〇四頁)
- (33) 八日丁卯。天晴。今日釋奠也。(略)講三礼記一。(略)題云。必得三其壽一。(略)(同三、二、八、同書、八四八頁)
- (34) 十日丁卯(略)今日釋奠也(略)題云、必得其祿、禮記(略)(下) (承安四、二、一〇、同書一、五〇頁)
- (35) 三日丁巳(略)今日釋奠也(略)題云、受天之祐、毛詩十(略)(下) (同四、八、三、同書一、五〇頁)
- (36) 五日、丁巳(略)此日、釋奠也(略)題云、庶尹允諧、尚書第二(略)(同五、二、五、五、同書一、四二五頁)
- (37) 九日、丁巳(略)今夕、釋奠(略)題之。人者靜、語(略)(下) (同五、八、九、同書一、四六七頁)
- (38) 三日、辰(略)昨日釋奠云々(略)題云云、降福無レ疆、(略)(治承二、二、三、同書二、一五一頁)
- (39) 九日丁酉(略)今日釋奠也(略)題云、以學文、論(略)(下) (同三、二、九、山槐記。二、二二二頁)

平安朝後期記録に現れたる「釈奠詩題」を論じて「七経輪転」「行事曆注」に及ぶ(臺藏)

- (40) 七日丁亥(略中) 今日釋奠也(略中) 大學寮火事以後、於官廳所被行也(略中) 題者(略中) 孝經聽講云々(略下) (同四、八、七頁)
- (41) 九日丁未(略中) 今日釋奠也(略中) 題云、信以成、論語(略下) (壽永元、八、九、吉) (記一、三〇九頁)
- (42) 二日丁酉(略中) 今日尺奠也(略中) 大學寮燒亡、於官廳被行之(略) 紙枚書云、定民志、(略下) (同三、二、二、)
- (43) 一日丁巳(略中) 今日釋奠也(略中) 題云、子庶民、(略下) (元暦元、八、一、山) (禮) (槐記三、一七七頁)
- (44) 九日、丁(略中) 此日、釋奠也(略中) 所_レ出之題、論語文泰而不_レ驕、(略下) (文治三、二、九、玉) (葉三、一五三頁)
- (45) 五日、丁(略中) 今日、釋奠(略中) 題、政如_二農功_一、(略) (同三、二、五、同書三、) (國書刊行會本、三二三頁)
- 五日、丁(略中) 晴、釋奠(略中) 題、政如_二暑歸_一、(略) (同三、二、五、同書、大日本) (史料本、四の一、八一五頁)
- (46) 四日、今日釋奠也(略中) 題曰、(略下) (同四、八、四、吉記二、) (千祿百福) (史料大成本、一六〇頁)
- 四日、今日釋奠也(略中) 題曰、(略下) (同四、八、四、同書、大日本) (毛詩文、) (史料本、四の二、四二二頁)
- (47) 五日(略中) 今日釋奠也(略中) 題有德(略中) (建久六、八、五、) (三長記一八六頁)

管見の致す所、以上がその史料である。これらを整理して、出典箇所をも調べて、前稿と福田・翠川両氏の三者の採択状況、更に『大日本史料』『日本儒学年表』(斯文会編、初版大正十一年刊、飯塚書房版、昭和五十一年刊)の指摘をも加へて、表示すると第一表の通りである。尚、これらの異同に就いては、本論で個々に述べることは控へ、本表備考欄に略述することにした。識者幸に諒恕されたい。本表を作成して気付いた点を、例示的に述べると、以下の如くである(順不同)。

第一表 積奠詩題採択状況一覽

11	10	9	8	7	6	5	4	3	2	1	号番
1098	1096	1095	1094	1092	1087	1080	1078	〃	1076	1010	曆西
2・2・8 承德	元・2・6 永長	2・8・14 〃	元・8・8 嘉保	6・2・14 〃	元・8・8 寛治	4・8・7 〃	2・2・2 承暦	3・8・4 〃	3・2・1 承保	7・8・1 寛弘	年月日
〃	〃	〃	〃	中	本	〃	〃	〃	水	紀略	記録
尚書	左伝	周易	尚書	周易	尚書	尚書	周易	毛詩	礼記	周易	講經 經書
平秩東作	賓有礼	大有慶	俊乂在官	天地養萬物	野無遺賢	德洽民心	上下順	四方來賀	比德於玉	聖人養賢	詩 題
堯典	隱公11年	上象伝	皐陶謨	上象伝	大禹謨	大禹謨	上象伝	下武六章	玉藻	上象伝	出典篇目
○	○	×	○	○	○	○	○	○	○	○	前
○	○	×	×	○	○	○	○	○	○	○	福
○	○	×	×	○	○	○	○	○	○	○	翠
3-5 36 題	3-4 148 文題	3-3 871 出題	3-3 434 詩題	×	×					×	採 摺 論 考 大日本史料
					C				B	A	
										○82	儒学
㊦「承德」トスルハ「承德」ノ誤		㊦「式次第あり」トスルモ詩題指摘ナシ	㊦「詳細な式次第あり」トスルモ詩題指摘ナシ	㊦「二・四」ハ「二・十四」ノ誤							備 考

平安朝後期記録に現れたる「積奠詩題」を論じて「七経輪転」「行事暦注」に及ぶ(臺藏)

23	22	21	20	19	18	17	16	15	14	13	12	番号	
1126	〃	1120	〃	1118	1112	1111	1110	1108	1107	1103	〃	曆西	
元・大 治・2 ・1	元・〃 8・ 9	元・保 安・2 ・6	元・〃 8・ 7	元・元 永・2 ・5	3・〃 2・ 10	2・〃 8・ 17	元・天 永・8 ・1	元・天 仁・8 ・10	2・嘉 承・2 ・10	5・康 和・8 ・10	2・〃 8・ 2	年月日	
永昌	〃	中	中	中	〃	中	殿	〃	中	本	〃	記録	
尚書	左伝	周易	毛詩	礼記	論語	毛詩	孝経	尚書	孝経	孝経	論語	経講 書経	
政在養民	養民如子	仁以行之	思賢材	貴徳而尚齒	鳳凰來儀	庶民子來	聴講孝経	上下治	聴講孝経	聴講古文孝経	以道事君	詩 題	
大禹謨	襄公14年	文言	関雉序	祭儀	益稷 (尚書)	靈台四章		周官			先進	出典篇目	
○	○	○	○	○	×	×	×	×	×	×	○	採 摺 論 考	
○	○	○	○	○	×	×	×	×	×	×	○		前 福 翠
○	○	○	○	○	○	○	×	○	×	×	○		大日本史料
	3-25 2 題 E	×	3-20 102 題	×	3-12 451 詩ヲ賦ス題 D	3-11 393 詩題	3-11 1 詩題	3-10 248 題ヲ書キ進ム	×	3-7 92 敦基題ヲ献ス	×	儒学	
												備 考	
	③「養民如子者」トスルハ誤		⑦③全右 「尚書」ト推定スルハ誤	⑦③「礼記」ヲ推定トスルハ誤 ③経書名ヲ記サズ、不審							⑦③全右		

平安朝後期記録に現れたる「釈奠詩題」を論じて「七経輪転」「行事曆注」に及ぶ（臺藏）

36	35	34	33	32	31	30	29	28	27	26	25	24
1175	〃	1174	1153	1152	〃	1151	1147	1134	〃	1133	1132	1130
元安 元 2 ・ 5	4 ・ 8 ・ 3	4 ・ 2 ・ 10	3 ・ 2 ・ 8	2 ・ 2 ・ 2	元 ・ 8 ・ 10	元仁 平 元 ・ 2 ・ 6	3 ・ 8 ・ 6	3 ・ 2 ・ 7	2 ・ 8 ・ 5	2 ・ 2 ・ 朔	元長 承 元 ・ 2 ・ 15	5 ・ 8 ・ 7
玉	〃	吉	〃	〃	〃	〃	本	〃	〃	〃	〃	中
尚書	毛詩	礼記	礼記	左伝	周易	論語	論語	周易	論語	尚書	礼記	周易
庶尹允諧	受天之祐	必得其祿	必得其寿	敏而事君	上而尚賢	君子懷德	礼以行之	上下応之	遠者来	五典克従	数学和例	照明德
益稷	下武六章	中庸	中庸	襄公27年	上象伝	里仁	衛靈公	上象伝	子路	舜典	(不明)	下象伝
○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	×	○
○	○	○	○	×	○	○	○	○	○	○	○	○
○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○
○ 118												
		㊦「玉葉」ハ不要						㊦㊧「尚書」トスルハ誤 出典篇目ヲ「比」トスルハ「小畜」 ノ誤ナリ	㊦「遠者来」トスルハ誤		㊦㊧「数学和制」トスルハ誤 卒業論文デハ詩題トス。	

	47	46	45	44	43	42	41	40	39	38	37	番号	
	1195	1188	1187	1186	1184	1183	1182	1180	1179	1178	〃	曆西	
	6・8・5	4・8・4	3・2・5	2・2・9	元・8・1	2・2・2	元・8・9	4・8・7	3・2・9	2・2・3	元・8・9	年月日	
	三長	吉	〃	玉	山	〃	吉	〃	山	〃	〃	記録	
	毛詩	毛詩	左伝	論語	礼記	周易	論語	孝経	論語	毛詩	論語	経書	
47	有徳	千禄百福	政如農功	泰而不驕	子庶民	定民志	信以成	孝経聴講	以学文	降福無彊	人者静	詩題	
	民勞五章	仮楽四章	襄公25年	子路	中庸	上象伝	衛霊公		学而	列祖一章	雍也	出典篇目	
36	×	○	○	○	○	×	○	×	○	○	○	採	
38	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○		前福翠
41	○	○	○	○	○	○	○	×	○	○	○		大日本史料
13	×	4-2 421 詩題 千禄百福	×	4-1 143 論題								採論考	
	G		政如暑歸		F							儒学	
6	○ 125		○ 121		○ 120			○ 120				備考	
		㊦㊧「千禄百福」トスル ㊨「千禄百福」トスル				㊦「玉葉」トスルハ「吉記」ノ誤ナリ		㊦「孝経」ト推定スルハ誤、 ㊨「詳細な記述あり」トスルモ詩題指 摘ナシ	㊦「玉葉」ハ不要	集ハ不要 ㊦㊨「2・3」ハ記載日、 ㊦㊨「2・2」トス、 ㊦「古今著文」	㊦㊨「人者静」トスルハ誤		

(注) 1 本表は、本論に抄出した積奠詩題の史料を、整理したものである。

2 記録欄の略称号は、第二表に同じである。

3 採択論考欄の前は前稿、福は福田、翠は翠川、儒学は日本儒学年表の略である。○は採択、×は不採択を表す。

4 大日本史料欄の3は第三編之第三、434は頁数、詩題は頭注指摘を示す。自余は類推されたい。

5 大日本史料欄のA・B・C・D・F・Gは前稿作成時に刊行済。D・Eは前稿発表後に刊行。(二)令和十一月末日の刊行状況基準。日本儒学年表欄の数字は頁数である。

6 備考欄の⑥は台藏、⑦は福田、⑧は翠川の略であり、その指摘は簡略を旨とした。本表末尾の数字は、其々の採択数を表す。

※ 倉林氏が著書の中で「俊又在官」(488頁)、翠川氏が年表の中で応永二十年二月「又時暘若」、永享二年八月「惟民從又」(両者共に240頁)としてゐることは、三例共に「又」の誤りである。偶然にも両人共に同じ誤まりを冒されたことは、只単に誤植に過ぎないと看過するには、余りにも軽率である。問題視するには足らぬ細やかな誤まりと言へば、さうかも知れないが、問題は経書の辞句であり、本稿で問題提起してゐる事柄に拘はるものであり、茲に一考を促す為にも記述して置く。(R四、七、七)また同年表の建保三年八月十日の「供其爵祿」(246頁)は「保」、同じく応永三年八月十二日の「明鹿政」(241頁)は「庶」の誤まりである。同年表には、他にも出典や経書に誤記が多い。

○考察

(あ)先づ、一見して分ることの第一点は、(8)～(18)の間に八例の不採択が集中してゐる。或るは二人共に、極付は(9)(13)(14)(16)の四例を三人一緒に採択してゐない。『大日本史料』は(8)(9)(15)(16)(17)を詩題と指摘してゐる。さすれば(13)(14)にも気付く筈である。否、三者共に先行論考に注意すること無く、調査を進めたかの如くである。事実筆者自身、前稿作成時『大日本史料』に注意すること無く、調査を進めてゐた。福田・翠川両氏も同様の如くに見られる。(翠川氏は、『大日本史料』を披見してゐながら、注意してゐないやうである。(9)参照。)

平安朝後期記録に現れたる「積奠詩題」を論じて「七経輪転」「行事曆注」に及ぶ(臺藏)

(い)次に、採択の数(本表末尾に
指摘数記入) 的には翠川氏が最多であるが、年表の中で講經・詩題を記されたもので、拾ひ出さねばならず一覽するには不便である。福田氏も講經・詩題を書き出し、詩題の出典箇所をも記されてゐるが、表示に物足りなさを感じる。両氏共に見落し・誤記がある。追記、翠川氏は、七経輪転には触れてゐない。

(う)福田・翠川両氏共に、使用した刊本が何であるのか、記されてゐない為、得られた結果に判断を示すには支障がある。只、翠川氏は「『大日本史料』集録のものはこれを生かし、他は原典に当たった。」(前掲論文
二五八頁)と述べてゐる。とすれば、同書を参考にする所があつたであらう。縦令、意識的に参考にしないにしても、闇々裡にそれに対する考へを定めるに力のあつたものとして、同書の存在を認めない訳にはいかないであらう。殊に、(19)(20)の経書名を記さなかつたり、推定とするは不審である。(付(ウ)
参照)。また(46)を両氏共に「千禄百福」としてゐるのを見ると、『大日本史料』を使用してゐるものと思はれる(出参
照)。

(え)詩題の出典箇所は、『五经索引』(森本角
蔵氏編)『十三经索引』(開明書
店刊)を用ゐて調べた結果を記したもので、その状況を一々記すことは煩瑣故控へ、篇目のみを記した。福田氏も略同様の結果を得られたが、筆者の記述と相違する点(周易
の篇目)があるのは、漢学には大学の教養講座程度の知識しか持ち合はせてゐない、門外漢の筆者には分らない。索引の記載に従つたまでである。

(お)(19)(20)(38)(42)の四例は、史料大成本や刊本には講經名が記されてをらず、索引で調べた結果を書き加へたものである。(19)(20)は『大日本史料』が刊行され、経書名が明記されてゐる。前三例は前稿で述べた。(42)「定民志」は、『周易』上象伝に、「上天。下澤履。君子以辨二上下一。定二民志一。」(『五经索引』三の七
五〇頁、四の二三頁)とある。従つて経書は『周易』である。

(か)(18)「鳳凰来儀」は、『尙書』益稷に「笙鏞以間。鳥獸跕跕。簫韶九成。鳳凰来儀。」(『五经索引』三の七
〇七頁、四の五二頁)とある。この時の講書は『論語』であり、詩題は『尙書』から撰ぶといふ齟齬を生じてをり、調査した中で唯一の例である(後述(イ)
参照)。

(き) (2) (5) (15) (20) (37) (41) は經書原文と記録文との間に、文字或は文辭に相違がある。即ち(2)「比德於玉」が原文に「於玉比德」、(5)「德洽民心」が「德洽于民心」、(15)「上下治」が「治神人。和上下」、(20)「思賢材」が「思賢才」、(37)「人者靜」が「仁者靜」、(41)「信以成」が「信以成之」とあつて、文辭の倒置や省略、通用文字の使用が見られる。

(く) (35)「受天之祐」は、『毛詩』に用例が四例あり(小谷信 甫桑、下武六章(二))、何れを是とすべきか判然としないが、「卷十六」とある注記に従へば下武六章に求めることが出来る(福田氏は、篇目四ヶ所を示すのみで、特定してゐない)。

(け) (1) と (7)、(3) と (35)、(29) と (41)、(33) と (34) は同一章句から撰ばれてゐる。即ち『周易』上象伝に、「天地養萬物」(7)注。聖人養賢。(1)注。以及萬民。頤之時大矣哉。、『毛詩』下武六章に「於萬斯年。受天之祐。受天之祐」(35)注。四方來賀。(3)注。、『論語』衛靈公に「君子義以為質、礼以行之」(29)注。孫以出之、信以成之、(41)注。君子哉。、『礼記』中庸に「必得其祿」(34)注。必得其名。必得其壽。(33)注とある。

(こ) (4)「上下順周易第一、云々」、(35)「受天之祐毛詩、十六卷」、(36)「庶尹允諧尙書第二」、また(6)「野無遺賢尙書文」、(11)「平秩東作尙書文」、(44)「論語文泰而不驕文云、君子泰而不驕、小人驕而不泰云々」、(46)「干祿百福毛詩文」とあるのは、『江家次第』卷五、釋奠に「書曰、仲春尺筭、聽講古文尙書、賦所寶賢、天慶五年、朝綱書様」の頭書に「今案題書様、題字其、書其卷如此可書也」(增補、故実叢、一四四頁)とある書様の实例で、前群にその典型例を見ることが出来る。また(42)「定民志也」もこれと同一視出来ないにしろ、これに類した書様ではあるまいかと思はれる。縦令、記録の記主が個人的に記したものであつたとしても、よし書様に文字数を記せとの規定がなかつたとしても、文字数の正確を期す為に記されたものであるかも知れない(44は原文をそのまゝ、記してゐる)。

(さ) (13) (14) (16) (40) は自余の例と異なるが、(13) (16) を『大日本史料』は詩題と指摘してゐる。これは「仲春尺筭、聽講古文尙書、賦所寶賢」の——部分を採つたもので、詩題と認めても差し支へあるまい(福田氏は(40)を採択しながら、(13) (14) (16)を採択してゐない)。本表に記した『孝經』の詩題四例は、書中の文辭で記されてゐない。(25)は索引で調べたが出典箇所は分らなかつた。「出題、敷

平安朝後期記録に現れたる「釈奠詩題」を論じて「七経輪転」「行事曆注」に及ぶ(臺藏)

學和例」とあるので、詩題としてもよからう。これらは「書中にある語を扱ひ、詩題とし」といふ概念に拘泥する余り、詳細に見る眼を失してゐた。儀式書と記録とを対照比較することで、詩題とする蓋然性は高いと言へる。

(リ)『大日本史料』に就いて見れば、現在続刊中であり断言は出来ないが、折角続いて来た指摘(頭注として簡略に記されてゐる)が途切れたりしてゐるのは、担当者が交替するからであらうか。物体無いことである。(19)〜(43)は前稿作成時未刊であり、その後(22)迄刊行されたが(19)(21)を指摘してゐない(研究論文を斟酌しないのであらうか)。

(ウ)収載史料に就いては、知られてゐなかつた史料を紹介してをり、(19)(20)の講經名を史料大成本は記してゐないが、「宮内庁書陵部所蔵九条家(新)写本」を用ゐられたことで、講經名が明記されてをり、前稿の調査の正しいことが知られた。

(セ)記載に就いては、(45)「政如農功」(国書刊行会本)が異なり「政如暑歸」とあつて、索引で調べたが出典箇所は分らなかつた。(46)は史料大成本の「千・祿百福」が「千・祿百福」とあつて、「千」と「千」との文字に違ひがある。⁽³⁾

(ソ)①は平安中期に入るが、便宜上一緒に述べて置く。前掲史料の通りであるが、『日本紀略』の記事は大半が「釋奠」と記すだけで、本条の様に詩題を記す例は他に無く、記事が簡略と言はれる本書であるが、貴重な一例と言へよう。

(タ)②(3)、(9)(10)、(11)(12)、(17)(18)、(19)(20)、(21)(22)、(26)(27)(28)、(30)(31)(32)、(34)(35)(36)(37)、(41)(42)と連続して現れるのは重要な手懸りとなる。また、(5)(6)(23)(29)(47)は第二・三表を見ての通り、その前後に講經記事が無く、七経輪転調査の橋頭堡となつてゐる。

(チ)記載文献を見ると、数的には「中右記」(19)が最多、以下「本朝世紀」(7)、『玉葉』と『吉記』が同数(5)、『水左記』(4)、『山槐記』(3)の順に続く。残りの四書(日本紀略、殿曆、永昌記、三長記)も各々貴重な事例を一例づゝ記してゐる。

(ツ)日記以外で年月日の明確な釋奠詩題としては、『扶桑集』に収められた三善清行の釋奠詩序であらう。即ち

仲春釋奠聽講論語賦有_レ如_二明珠_一詩序

善相公

貞觀十九年仲春上丁。(中) 講_二述論語_一。(下) 〔群書類從〕文(筆部、五七一頁)

とあり、『三代実録』を補ふ(元慶元年二月五日丁未条に相当。小山田和夫氏『三代実録係年史料集成』参看) 代表的事例である、また『江家次第』巻五、釋奠に「書

曰、仲春釋奠聽講古文尙書、賦所寶賢、天慶五年(增補故実叢書、一四四頁) 朝綱書様とあるのは、天慶五年二月三日の釋奠である。

(て)「人者靜」を福田・翠川両氏は「之人者靜」としてゐるが、確かに国書刊行会本には「題之人者靜」とある。しかし經書原文には「仁者靜」とある。『玉葉』原本を見てゐないので確言は避けねばならないが、刊本を見てゐた際にふと「之」は「云」の誤読ではないかと思ひ浮んだ。両者の草書体は酷似してゐる。検証が必要であらう。

(と)『日本儒学年表』は、年表の中で詩題を指摘してをり、その数はわづか六例と少ないが、釈奠研究の早い時期のものとして、刻んで置いてもよからう。尚、大宝元年の項に「二月(四日)丁巳大學寮に於て釋奠す」(頁三)とあるのは「十四日」の誤りである。

(な)19(20)の經書名を福田・翠川両氏が記さなかつたり、推定とされてゐる(福田氏は推定が誤つてゐる)のは不審である。その部分
は『大日本史料』第三編の19・20に収載(19は指摘なし、20は指摘す)、されてをり、19は昭和五十二年・20は同五十六年の刊行であり、
披見する機会があつたであらう。即ち、両氏の論考発表以前の刊行であるから、十分に披見出来た筈であり、そこには、史料大成本に記されてゐない經書名が明記されてゐるので、難はなかつた訳である。前稿発表時は未刊であつたので、索引で調べた結果を書き加へてゐる(前稿第四表の12、13、本稿(参照))。

(に)前稿三十六例が本稿四十七例になつたのは、①覺書に記した、經書の中より撰ばれた六例(9)(15)(17)(18)(42)(47)、②『大日本史料』が指摘してゐる「聽講孝經」とある四例(13)(14)(16)(40)、③出典箇所が分らない一例(25)、卒業論文では指摘してゐるの計

平安朝後期記録に現れたる「釈奠詩題」を論じて「七経輪転」「行事曆注」に及ぶ(臺藏)

十一例を加へたことに拠る。

(ゆ)『中右記』には、管見の限りであるが、詩題缺文例が三例ある。「……周……題云○」(嘉承元、二、十)、「……講論語……仰云、題、……」(元永二、八、三)、「……釋奠……講書、題、……」(大治二、八、十)、「……」(五、三二、九頁)である。詩題が記されてゐない。

(ね)総覧して見ると、関根氏が「書中にある語を採ひ、詩題とし」と述べられた通りであることが分る。今少し詳しく言へば、出典箇所として調べた篇目は、その時の都堂論義で講ぜられた箇所であり、将又(二)で述べたことは、その事を限定するものであるかも知れない。かう言ふと、研究としては聊想像の度が過ぎるといふ批判を受けるかも知れない。

(ぬ)福田氏は「詩題は文章の摘句または詩句である。(略中) 詩文の一句一節をそのまま取ることを基本としているようである。(略中) 中には文章を簡略化したり、助詞などを省いて節録したものもある。」(前掲論文)と述べ、詩題の出典分布を調べて「全体を俯瞰すると、各テキストの前半から詩題を採取している傾向にある。これはややもすると釈奠の講経が前回の講経の進度などを参考することなく始めから講義をくり返した為ではないだろうか。」(前掲論文)と述べてゐる。(福田氏の採択範囲が、拙稿と重複) (してゐるのは、披見されたからか。)

以上、前稿の欠を補ひながら重複する点(前稿補注で述べた事柄を繰り返した部分が多い。(き)(け)(こ)がそれに当る。)も多く、福田・翠川両氏、『大日本史料』を交へて、縷々述べて来た。とは言ふもの、新知見が得られた訳でも無く、只関心の赴く所を表面の撫付をしたゞけかも知れない。釈奠詩題に就いては、概略上述の通りである。

二、学術用語「七経輪転」

七経輪転とは、釈奠都堂論義の対象となる経書が、孝経から始まって礼記・毛詩・尙書・論語・周易・左伝の七経を、この順序で釈奠の都度一経づ、順繰りに講ぜられ、一循すると再び孝経にもどつて、同様の繰り返しを行ふことを言ふ。

所で、筆者が釈奠研究を始めた昭和四十四年頃、そもやそも「七経輪転」という学術用語は無かつた。その事に就いて、管見に触れた主な論考を、少し長くなるが、列挙すると次の通りである。

『日本教育史資料書』は、「學令制定の後は大學の教化内容となつて居た諸書が盛に讀まれたであらうことは、天皇の御前又は釋奠の場合に於いて是等が屢々披講・論義せられたことによつて窺ひ得るであらう。『論語』・『孝経』・『禮記』・『左傳』・『詩經』・『易經』・『書經』等幾多擧げ得る」(第一輯二六四頁)。『國史大辭典』は、「都堂院にて講論あり、孝経、禮記、毛詩、尙書、論語、周易、左傳等年によりて異なれり、次に文章博士上宣に隨うて題を獻じ文人詩を賦す、」(シヤクテンの項、富山房刊一四〇五頁)。桃裕行氏は「これに採用されたテキストの知られるものを拾つて見ると(天長頃より)、毛詩・尙書が多く、周易・左伝・礼記・孝経の順で論語が最も少く、他(周礼・儀礼)は見えない。」(『上代学制の研究』昭和二十二年刊、七八頁。同氏著作集、平成六年刊八三頁)。池田龜鑑氏は「これを『宴座』という。文章博士が題を出し、詩を賦する。題は孝経・礼記・毛詩・尙書・論語・周易・左伝などの書中にある語を拵び、(中略)出題に用いる諸書は毎年輪転して用いられる。」(『平安時代活』至文堂、昭和四十三年刊、五三九頁)。久木幸男氏は『大学寮と古代儒教』で「論義に用いられる儒教科の教科書は、『年中行事秘抄』によると、學令に規定する九部の教科書中、『周礼』『儀礼』を除いた七種類で『孝経』『礼記』『毛詩』『尙書』『論語』

平安朝後期記録に現れたる「釈奠詩題」を論じて「七経輪転」「行事曆注」に及ぶ(臺藏)

『周易』『左伝』の順に一つずつとり上げられることになっている。」(サイマル出版会、昭和四十二年刊、二九頁)。山中裕氏は「孝経、論語、五経等を年々順次に用いて論義問答を行い」(平安朝の年中行事、昭和四十六年刊、一六八頁)といふ具合である。斯様に、七経やそれを輪転して講ずるといふ事象は知られてゐたが、名称としての學術用語「七経輪転」は無かつた。

その事象に名称が付けられたのは、昭和四十七年、弥永貞三氏が「古代の積奠について」の小節題で、「七経輪転購読」(『続日本古代史論集』下巻、四一六頁。後に『日本古代の政治と史料』所収、昭和六十三年刊、本稿は前者を使用)と用ゐられたことを以て嚆矢とするやうである。次いで筆者は、昭和五十年「平安朝積奠に於ける『七経輪転』の一考察」と括弧で括り論文題を設けた。その後、管見の範囲であるが、次のやうな論考が発表された。

久木氏は「大学寮寛書」(『横浜国立大学教育紀要』十、八、昭和五十三年、一〇二頁)、『講座日本教育史』(五巻、昭和五十八年刊、三四頁)、『國史大辭典』(八巻、昭和六十二年刊、三三〇頁)、『日本古代学校の研究』(平成二、二、昭和五十二年刊、一〇二頁)、『國史大辭典』(十五巻中、事項、索引、三五二頁)、『有職故実大辭典』(積奠の項、平成八、倉林正次氏は「饗宴の研究」(歳事索引篇、昭和六十二年刊)所収論文。所功先生は「日本における積奠祭儀の特色」(『京都産業大学論集』人文系列、平成十三年刊、五五二頁)で「七経輪転」を使用した。また桃氏は「上代学制の研究」復刊で「七経輪転講義」(『平安時代史事典』は「承和年間に始まる七経輪転講書」(本編上、積奠の項、昭和六十二年刊、一三六頁)福田氏は「七経輪転講義」といふ具合に用ゐられた。(追記、『平安時代儀式行事事典』(東京堂、平成十五年刊)は、「七経の順序を記して七経輪転購読」(五七頁)としてゐる。)

即ち桃氏は「上代学制の研究」で「まず七八頁二行以下には、この頃の積奠における七経輪転講義について記すべきであつた。弥永貞三氏『古代の積奠について』、台蔵明氏『平安朝積奠に於ける七経輪転の一考察』が参考されるべきである。」(復刻あとがき、昭和五十八年刊、六頁)、『國史大辭典』は積奠の項で「講論は(中)論義形式で行われる。テーマは『孝経』など七種の儒教古典から順次選定され、これを七経輪転という。」とあるが、七経とその順序を記してゐないのは正確では無く、不親切と言ふべき(八、三、六頁)、『有職故実大辭典』は、本書の転載であり、同内容である(四、一頁)。「七

経輪転」の立項は無く、辞典に記載された初めてである。「索引」には立項されてゐる。久木氏は筆者の批判を受けて、前著の改訂版『日本古代学校の研究』で「論義に用いられる儒教科の教科書は、『口遊』によると、学令に規定する九部の教科書中、『周礼』『儀礼』を除いた七種類で（前掲文に同じ。七経の順序を記す。中略）一つずつとり上げられることになつており、これを『七経輪転』という。」（平成二年刊 二〇五頁）と書き改められた。倉林氏は前掲書所収論文で七経輪転を多く使用。所先生は前掲論文で「講論の経書は（略）『孝経』↓『礼記』↓『毛詩』↓『尚書』↓『論語』↓『周易』↓『左伝』の順に春秋一回一経ずつ使用する。七経輪転の慣習が平安前期から室町中期まで励行されている。『山川日本史小辞典』は「講論では、『孝経』『礼記』『毛詩』『尚書』『論語』『周易』『春秋左氏伝』が1回の積奠で1経ずつ順番に論義され、七経輪転といつた。」と七経とその順序を辞典に記載した初めである（『日本史大辞典』の小型版といふ。こゝ。尚、ちらが先か。平成十三年刊、五四二頁）。尚、筆者が研究を始めた頃、世に流布してゐた『日本歴史大辞典』（十一巻、昭和三十一年刊、年刊河出書房新社）の積奠の項（四一六）は、極めて簡略な説明で、講論に就いて記されてゐない。（追記、『日本史大辞典』（山川出版社、平成九年刊、一二〇頁）を確認した所『山川日本史小辞典』は、同記述・転載である。）

此様に、昭和四十七年の弥永氏、昭和五十年の筆者以降、「七経輪転」が一気に拡まり諸氏に陸続と使用され、『國史大辞典』に記載されたことで、學術用語として定着し認められたとしても差し支へあるまい。（8）

次に、七経とその順序を記す文献として、前稿の第一表の他には、『明文抄』文事部に「七経。孝経。禮記。毛詩。尚書。論語。周易。左傳。」（『統群書類従』公第如此。『雑部』一八九頁）とある。また『師遠年中行事』に「孝。禮。詩。書。論。易。輪轉講之。」（『統群書類従』公元年中行事』に「孝禮書論易傳輪轉講之。」（同書、二一九頁）、『師光年中行事』に「孝。禮。詩。書。論。易。輪轉講之。」（同書、三三九頁））とある。『師遠』には抜けた部分があるけれども、経書名とその順序に就いては、諸書に変化はない。これらの外に、今一つ重要な記述がある。三条西実隆の『実隆公記』の永正二年七月一六日条に、次の通りある。

平安朝後期記録に現れたる「積奠詩題」を論じて「七経輪転」「行事曆注」に及ぶ（臺藏）

十六日亥(略) 覺城法師來談 (略中)

尺○奠○講○書○輪○轉○事○覺○城○談

孝○禮○詩○尚○論○易○傳

(略下) (史籍集覽、同書、同日
條、卷四下、四三二頁)

和島芳男氏は、「積奠講書がすでに遠い昔のことのように忘れられ、実隆ほどの学者でもその七○經○輪○講○の旧例を知らなかつたことがうかがわれるが、こういうことを日記に書きとめるのは一面において積奠の旧儀に対する実隆の関心を物語るものであろう。」(『中世の儒学』日本歴史叢書、書、昭和四十年刊、一八五頁) と述べられてゐる。ここに弥永氏より先に、「七經輪講」と用ゐられたが、「七經輪転」の様には多く拡まらなかつた。

弥永氏の「七經輪転購読」、桃氏の「七經輪転講義」ではなく、筆者の「七經輪転」が大方の賛同を得て、拡まり定着したことは驚駭であり、僥倖である。

これら諸書の記載に就いて、弥永氏は、「『学者兼習せよ』と学令が規定した儒教の根本經典であると同時に初学の書でもある孝經と論語とを最初と中間に配置したのは、連年聴講する学生の交替を考慮に入れたためであるかもしれない。」(前掲論文) (四三八頁) と述べられてゐる。

三、平安後期の七經輪転の実態

積奠詩題が七經輪転の考察に重要な手懸りを提供すると述べたが、それを確認する為に平安後期の積奠記録を踏まへて、年表にして考へることにしよう。

筆者は前稿で、承保三年春より保元二年秋迄(前稿第 五表)と承安四年春より建久六年秋迄(前稿第 六表)を表示してゐる。両表の中間に当る保元三年春より承安三年秋迄の講經記事を見出せず、表示も論述もしなかつたが、発表後講經記事に気付き、導き出した原則を適用し、三つの年表を矛盾無くピッタリと連結することが出来た。そこで補訂を兼てまゝとめることとした。それが第二表である。^⑩

第二表 平安後期の七経輪転

1082	1081	1080	1079	1078	1077	1076	暦西
2	永保元	4	3	2	承暦元	承保3	年次
ア	ハ	ア	ハ	ア	ハ	ア	区分
■本				□			春秋
				□			孝経
						●水	礼記
		□				●水	毛詩
		●水			□		尙書
	□				■年中		論語
	■水、江			●水			周易
□				□			左伝
		5				3	備
				4		2	考
→							

平安朝後期記録に現れたる「釈奠詩題」を論じて「七経輪転」「行事暦注」に及ぶ(臺藏)

1093	1092	1091	1090	1089	1088	1087	1086	1085	1084	1083	曆西	
7	6	5	4	3	2	寛治元	3	2	応徳元	3	年次	
ア	ハ	ア	ハ	ア	ハ	ア	ハ	ア	ハ	ア	ハ	区分
	●地下											春秋
				□								孝経
■師通	中			□				□			■師通	礼記
			■中、江				□				■師通	毛詩
			■中			●本				□		尚書
		■江				□				□		論語
	●中				■江				■地下			周易
	■中				■江	年中			□			左伝
		7										備考
(イ)												

平安朝後期記録に現れたる「釈奠詩題」を論じて「七経輪転」「行事曆注」に及ぶ(臺藏)

1105	1104	1103	1102	1101	1100	1099	1098	1097	1096	1095	1094
2	長治元	5	4	3	2	康和元	2	承徳元	永長元	2	嘉保元
ア	ハ	ア	▼ハ	ア	ハ	ア	ハ	ア	ハ	ア	ハ
		●本				□			×中 師守		
	●中				■中目		師重 守憲	中目 江次	■中		
	●中				■年中			■中			■中 勘仲
□				中目	■殿		●中				●中
■中目 中、殿				■釈			●中			■中	
			●中			■本				●中	
		重中 憲目	×中			■本			●中		
		穢							穢		
		13					12	11		10	9
										8	



(口)

1116	1115	1114	1113	1112	1111	1110	1109	1108	1107	1106	曆西							
4	3	2	永久元	3	2	天永元	2	天仁元	嘉承2	嘉承元	年次							
ア	ハ	ア	ア	ア	ア	ア	ア	ア	▼	▼	ア	ハ	ア	ハ	ア	ハ	区分	春秋
			■中、殿			●殿					●中							孝経
		重憲	■中		积	■中、殿		師守	為房	×中、殿								礼記
		■积			●中				×中									毛詩
	□							●中										尙書
	□				●中			□										論語
□				■中				□										周易
			●地下					□										左伝
			不明						諒闇(中)	諒闇(中、殿)								備考
					18	17	16		15	14								

平安朝後期記録に現れたる「釈奠詩題」を論じて「七経輪転」「行事曆注」に及ぶ（臺藏）

1128	1127	1126	1125	1124	1123	1122	1121	1120	1119	1118	1117
3	2	大治元	2	天治元	4	3	2	保安元	2	元永元	5
ア	ハ	ア	ハ	ア	ハ	ア	ハ	ア	ハ	ア	ハ
	■ 中目			■ 中目			■ 園				□
■ 中目			■ 中目			■ 釈奠				● 中	
			■ 中目			■ 釈奠				● 中	
		● 永昌				● 中部			法御	■ 中	
		■ 中目			□				● 中		
	中目	■ 中			□			● 中			
中、百	■ 中目			□				● 中			× 園、釈 機
		23						22 21		20 19	

(ホ)

1139	1138	1137	1136	1135	1134	1133	1132	1131	1130	1129	曆西	
5	4	3	2	保延元	3	2	長承元	天承元	5	4	年次	
ア	ハ	ア	ハ	ア	ハ	ア	ハ	ア	ハ	ア	ハ	区分
	□							■時信				春秋
				■兵	■長秋							孝経
□				■中				●中				礼記
□							□			中目	■中	毛詩
			■中				●中			●中		尚書
			□				●中			■中		論語
		□				●中			●中			周易
	□				●中			□				左伝
						28	27	26	25	24		備考

平安朝後期記録に現れたる「釈奠詩題」を論じて「七経輪転」「行事曆注」に及ぶ(臺藏)

1151	1150	1149	1148	1147	1146	1145	1144	1143	1142	1141	1140
仁平元	6	5	4	3	2	久安元	天養元	2	康治元	永治元	6
ア	ハ	ア	ハ	ア	ハ	ア	ハ	ア	ハ	ア	ハ
			■本			■本				■本	
		■本				■本				■本	
		□				■本、台				■本	
	■本、台			年中	■本、台				■本		□
●本				●本				■本			□
●本			■本					■本、台			□
			■百				●台			□	
31	30			29							

(ホ)

1162	1161	1160	1159	1158	1157	1156	1155	1154	1153	1152	曆西
2	応保元	永暦元	平治元	3	2	保元元	2	久寿元	3	2	年次
ア	ハ	ア	ハ	ア	ハ	▽	ハ	▽	ア	ハ	区分
			●地下			■兵、山				●本	春秋
		□				×				●本	孝経
		□			×	兵			兵、百	■台、本	礼記
	□				■兵				■台		毛詩
	■山			□					■台		尙書
□				□				■兵			論語
■勘仲			□				×	兵		●本	周易
					諒闇(兵)	諒闇	穢				左伝
									33	32	備考
←											
→											

平安朝後期記録に現れたる「釈奠詩題」を論じて「七経輪転」「行事曆注」に及ぶ（臺藏）

1174	1173	1172	1171	1170	1169	1168	1167	1166	1165	1164	1163
4	3	2	承安元	2	嘉応元	3	2	仁安元	永万元	2	長寛元
ア	ハ	ア	ハ	ア	ハ	ア	ハ	ア	ハ	ア	ハ
	■玉、百			□				□			□
●吉				□			□				□
●吉			■玉				■兵			□	
			□			●地下				□	
		■玉				□			□		
		■玉			■兵				×		
	□				□			×			
35	34							諒闇	諒闇		



(ト)

1185	1184	1183	1182	1181	1180	1179	1178	1177	1176	1175	曆西				
文治元	元暦元	2	寿永元	養和元	4	3	2	治承元	2	安元元	年次				
ア	ハ	ア	ハ	▼ア	▽ハ	ア	ハ	ア	▽ハ	▼ア	ハ	ア	ハ	区分	春秋
		□			●山				×						孝経
	●山				×			園	■玉、百	4・28					礼記
	□			×吉				●玉	大学寮焼亡(玉、方丈)						毛詩
●地下				□			□						●玉		尚書
			●吉				●山						●玉		論語
			●吉			□							■玉		周易
		■百				■明月				×顕広					左伝
				諒闇	諒闇				諒闇	諒闇(顕広)					
	43		42 41	諒闇(吉)	40		39	38		37 36					備考
(へ)															

平安朝後期記録に現れたる「積奠詩題」を論じて「七経輪転」「行事曆注」に及ぶ（臺藏）

- (注) 1 本表は、承保三年春より建久六年秋迄を表示する。
 2 本表に用ゐた記号は、次の通りである。
 ▼、積奠乃至講経停止記事のあるもの。

1195	1194	1193	1192	1191	1190	1189	1188	1187	1186
6	5	4	3	2	建久元	5	4	3	2
ア ハ	ア ハ	ア ハ	▽ ア ハ	ア ハ	ア ハ	ア ハ	ア ハ	ア ハ	ア ハ
	■玉				□			□	
□				■玉、迎			■玉、積		
●三長				□			●吉		
			×			□			
		×				■園、積			●玉
		■園、百			●地下				■玉
	●地下				■玉			●玉	
47		諒闇 諒闇					46	45	44
←									

略称	記録名	使用刊本
水	水左記	増補史料大成
中	中右記	〃
中目	中右記目録	〃
永昌	永昌記	〃
長秋	長秋記	〃
兵	兵範記	〃
台	台記	〃
山	山槐記	〃
勘仲	勘仲記	〃
吉	吉記	〃
三長	三長記	〃
顕広	顕広王記	続史料大成、伯家記録考
師通	後二条師通記	大日本古記録
殿	殿曆	〃
猪鬮	猪鬮関白記	〃
地下	地下家伝	正宗敦夫氏編
江	江家次第	増補故実叢書

- ▽、積奠停止が推定されるもの。
 ●、講経名が明記されたもの。
 ■、積奠実施のみ明記されたもの。
 □、積奠記事は闕くが、積奠実施の推定し得るもの。
 ×、積奠が停止された場合、その時に講ぜられる順位に当るもの。
 本表に用ゐるた略称号（名^{史料}）と使用刊本は、次の通りである。

江次	江家次第抄	続々群書類従	
年中	年中行事秘抄	群書類従	
園	園太暦	太田藤四郎氏編、史料纂集	
時信	時信記	未見、史料綜覧卷三	
紀略	日本紀略	新訂増補国史大系	
本	本朝世紀	〃	
百	百練抄	〃	
方丈	方丈記	日本古典文学大系	
玉	玉葉	国書刊行会	
明月	明月記	〃	
師守	師守記	史料纂集	
重憲	少外記重憲記	大日本史料	3の4・6・15
為房	為房卿記	〃	3の9
中	中右記	〃	3の19・20・21
積	積奠記	〃	3の6・8・11・16・18・4の16
法御	法性寺殿御記	〃	3の21
積奠	積奠次第	〃	3の27・29
中部	中右記部類	〃	3の30
迎	迎陽記	〃	4の16

4、典拠を示す略称号は、記号傍に記した。

5、春秋区分欄のハは春、アは秋の略。

6、備考欄の1、2、3、…は、第一表の1、2、3、…に対応する。

7、備考欄の(イ)、(ロ)、(ハ)、…は、本論の(イ)、(ロ)、(ハ)、…に対応する。

平安朝後期記録に現れたる「積奠詩題」を論じて「七経輪転」「行事暦注」に及ぶ(臺藏)

平安中期迄に就いては、弥永氏が貞観より仁和迄の実態調査をして、「(一)七経の順位は厳格にまもられ(筆者注、以下弥永原則Ⅰと称す)、(二)何らかの事情で講経が停止されれば、そのとき順位にあたつていた経は、次回に講ぜられたので、中間を省略してその次の順位に移ることはけつしてなかつた(筆者注、以下弥永原則Ⅱと称する)」という二つの原則が確認される。(前掲論文(三二四頁)と述べられたことが、継受されてゐると前稿の調査で分つてゐる(前稿四)。

表作成の際、考慮した点及び気付いた点、前稿の繰り返しとなる部分が多いが記してみよう。

○院政時代

(イ)先づ承保三年春の「礼記」より永長元年春の「左伝」迄に就いて見れば、積奠関係記事の闕けた例(□で示す)に不安は残るが、表の如く一つの例外も無く順序を守つて現れ、「弥永原則Ⅰ」通りの結果となる。①

(ロ)永長元年春の「左伝」より天永二年秋の「毛詩」迄に就いて見れば、積奠が停止されてゐるのは永長元年秋(郁芳門院媯子内親(女御卒去、内(裏機氣に依る))・康和五年春(堀河天皇の崩御に依る))の穢に依る停止例と嘉承二年秋・天仁元年春の諒闇例(堀河天皇の崩御に拠る)である。このことを考慮に入れて従前の方法で作業を進めた所、停止(印×)の前後で辻褄が合はなくなり、考へ直して表の如き結果が得られた。即ち、何らかの事情で講経が停止され、ば、その時、順位に当つてゐた経書は省略されて、次回の積奠には一経(諒闇の時は二経)、後の経書に移るといふことが確認されたのである。従つて「弥永原則Ⅱ」が崩れてゐることは明白である。

(ハ)続いて天永二年秋の「毛詩」より同三年春の「論語」への講経順は、「尚書」を完全に省略してをり奇異を感じさせる(前掲史料07の88及びの参照)。何の理由も無く中間を省略してゐる例は、筆者が調査した中で、これが唯一のものである。如何なる理由で、斯様な次第になつてゐるのかは判然としない。

(ニ)続く同三年秋には積奠実施記事があり、永久元年秋には「左伝」を講じたことが明記されてゐる。これに講経順

を適用すれば、「周易」もしくは「左伝」の重複を例外的に認めねばならない。しかし、如何に例外としても同一經書を重複させる様なことはなかつたであらう。永久元年春は不明である。表示しないで置く。

(ホ)その後、永久二年春より保元二年秋迄に就いて見れば、積奠が停止されてゐるのは、永久五年春(下丁例不吉之由院宣)・久寿二年秋(近衛天皇崩御)の穢に依る停止例及び保元々々年秋・同二年春の諒闇例(鳥羽法皇の崩御に拠る)である。このことを考慮に入れ、ば、この期間の実態は表の如くであり、その結果は(ロ)と同じである。⁽¹²⁾

○平氏政権・源平争乱時代

(ヘ)承安四年春の「礼記」より建久六年秋の「毛詩」迄に現れる停止例は、全て諒闇例である。即ち、安元二年春・治承元年春(建春門院の崩御に拠る)、養和元年春・秋(高倉上皇の崩御に拠る)、建久三年秋・同四年春(後白河法皇の崩御に拠る)の六例である。このことを考慮に入れ、ば、この期間の実態は表の如くであり、その結果は(ロ)と同じである。⁽¹³⁾

(ト)保元三年春より承安三年秋迄に就いて見れば、停止されてゐるのは永万元年秋・仁安元年春の諒闇例(二条上皇の崩御に拠る)のみである。講經記事は、平治元年秋の「孝經」、仁安三年春の「尙書」のわづか二例であるが、この期間は講經停止の場合はその時の順位に当つてゐた經書は省略されて、次回の積奠には一經(諒闇の時は二經)後の經書に移るといふ結果を得てゐる(ホ)と(ヘ)の中間であり、この期間も同様の例であつたと考へるのが自然であらう。とすれば、その結果は(ロ)と同じである。

斯くして、承保三年春より建久六年秋迄の百二十年間の七經輪転の実態を、明らかにすることが出来た。見れば、少なくとも永長元年春迄は守られてゐた(弥永原則Ⅰ・Ⅱ)が、同年秋の積奠停止以降崩れて、何らかの事情で講經が停止され、ば、その時の順位に当つてゐた經書は省略されて、次回の積奠には一經(諒闇の場合は二經)後の經書に移るといふことが、確認されたのである。

尚、安元三年四月廿八日の京中大火で、大学寮は焼失してゐる。『玉葉』同日条に、
燒亡所々

大極殿已下、八省院一切不殘、

(略中)

大膳職、大學寮、孔子御影奉
レ取_二出_一之 (略下)

(同書同日条) とある。『方丈記』も、「去安元三年四月廿八日かとも。(略中) 都の東南より火出で来て、(略中) 大極殿・大學寮(略中) などまで移りて、一夜のうちに塵灰となりにき。」(同書、日本古典文)。(略中) と、この大火のことを記してゐる。積奠は執行の場を無くしたが、太政官庁に場を移して行はれることになり、源平争乱の世にあつて、継続してゐることも確認される。(15)

四、「行事曆注」と七経輪転

行事曆注とは、具注曆に記された行事に関する注記で、それを共有情報として行事に参加する人々に知らしめるのである。積奠に関しては、二月八月の上丁日に「積奠」とあり経書名が記され、それに従つて講経が行はれる。曆注は積奠実施の有無に関係無く、講経順位通りに記されるので、講経停止があればその時順位に当つてゐた経書は省略されて、次回の積奠には一經(諒闇時は二經)後の経書が講ぜられることになる。

その辺具体例を年表にして調べてみよう。幸にして数年分連続してゐるものが、『猪隈関白記』に残つてをり、それを利用してその前後を含めて、建久六年より建永元年迄を表示する。先づ年次の下に曆注に記されてゐる経書名を

記す。すると、正治元年秋より建仁三年秋迄の暦注を書き出すことが出来た。次に従前通り、記録に記された講経記事の経書名と一致する所に印を付ける。さうして出来たものが、第三表である。

第三表 行事暦注と七経輪転

1202		1201		1200		1199		1198		1197		1196		1195		西暦	
2		建仁元		2		正治元		9		8		7		建久6		年次	
ア	ハ	ア	ハ	ア	ハ	ア	ハ	ア	ハ	ア	ハ	ア	ハ	ア	ハ	春秋	区分
毛詩	礼記	孝経	左伝	周易	論語	尚書										暦注	
		●三長							■三長								孝経
	■猪関							□							□		日記
●猪関							×猪関								●三長		毛詩
						●猪関						■玉					尚書
					●猪関						□						論語
			□							□							周易
		□								□							左伝
德音是茂(猪関)				博學而篤志(猪関)		以治万方(猪関)								有徳(三長)		詩題	
						源頼朝薨去(猪関)										備考	

平安朝後期記録に現れたる「釈奠詩題」を論じて「七経輪転」「行事暦注」に及ぶ(臺藏)

1206	1205	1204	1203	西暦
建永元	2	元久元	3	年次
ア	ア	ア	ア	春秋
ハ	ハ	ハ	ハ	区分
			論語	暦注
			尚書	孝経
	□			
	×園			礼記
□				毛詩
●三長			■猪関	尚書
			■猪関	論語
		□		周易
		□		左伝
非天聰明(三長)				詩題
	穢(園)			備考

(注) 1、本表は、建久六年より建永元年迄を表示する。

2、本表に用ゐた記号・略称号は、第二表に同じである。

3、表示方法は、第二表に同じである。

ご覧の通り、正治元年秋より建仁三年秋迄の暦注と記録とが一致してゐる。即ち、正治元年秋(尚書)、同二年春(論語)、建仁元年秋(孝経)、同二年秋(毛詩)が、暦注と記録とがピッタリと合致してゐる。建久六年秋の「毛詩」より建永元年秋の「尚書」迄を見ると、講経停止の場合には経書が省略されて、次の積算には一経後の経書が講ぜられてゐることが分る。かうした状況が、少なくとも永長元年頃には成立してゐて、第二表に見る結果になつたものと考へられるのである。

正治元年春は、源頼朝薨去の穢氣に依り、式日を延引、下丁は宜しからずといふので停止された。『百練抄』に、「卅

積奠の事例調査には、翠川氏の詳細な研究があるとは言ふもの、更に積奠の法的規定に即した年表⁽¹⁶⁾（作成中、近く稿は同年表に多く）や事例をめぐる諸問題⁽¹⁷⁾（積奠と二月諸祭、諒闇）が残つてゐる。今後の調査に待ちたい。

末筆ながら、前稿が学界の一隅に命脈を保ち得たのは、桃裕行・久木幸男・弥永貞三諸氏の学恩と、所功・田中卓両先生の御指導の賜物であり、殊に桃・久木両氏、所先生には御著や『國史大辭典』、『有職故実大辭典』に名前を刻んで頂き、学徒冥加至極と言ふ外は無い。本稿を草するに際しても、此方々の学恩を享けてゐる。茲に深甚の謝意を表し、今稿成るに当り、我れ、諸葛亮孔明にはあらねども、「鞠躬盡瘁、死而後已。」の気概を持ちて、より一層の精進を重ねて、知り得た所をお伝へして行く所存である。

〔補注〕

(1) 前稿は、大学の卒業論文「上代積奠の研究」提出（昭和五十年正月八日）後、口頭試問（二月二日）の席上（主査は所功先生、副査は田中卓卓先生、西山徳先生）が積奠詩題と七経輪転との關係に就いて述べた点に注目され、本誌掲載を約言され、所・西山両先生も賛同された。そこで新に書き下しの新稿として、五月二十四日の二十七歳誕辰に脱稿。田中先生の校閲を受けて、そのまま投稿。（内容は、久木説批判と弥中・後期の七経輪転の美態、積奠詩題呈示等を、実例を以て論述したものである。）卒業論文は大学附属図書館に保管され、平成三十年七月に返却措置が取られ、同月二十三日落掌。本稿の参考とした。尚、本稿執筆中に田中先生の訃報（平成三十年十一月二十五日）に接した。本稿は凶らずも、偲ぶ草となつてしまつた。謹んで御冥福をお祈り申し上げる次第である。

(2) 『年中行事大概』二月積奠に「孝経以下の七経を輪転して講ぜられて。やがてその書の中のこと葉を題として。儒者ども文をつくる事あり。」（『新撰群書類従』公事部、三九四頁）とある。

(3) 新釈漢文大系『詩経』に、「干」は、現行本『干』に作る。兪樾が『樾謹みて按ずるに、干字は疑ふらくは千字の誤りならん。

千祿百福は、福祿の多きを言ふなり。(略中)此の千字明らかに是れ千字の誤りなり。(略中)『千』の誤字と解し、原文を改めた。(略中)
とある(同書下、平成十二年刊、一。)
(五八頁執筆は石川忠久氏。)

(4) 『六国史』(日本歴史叢書、坂本太一氏、昭和四十五年刊)に、「日本紀略は六国史時代とそれ以後では、性格が全くちがう。(略中)後者は記事がきわめて簡略な上に、かけられた年月日に杜撰な点が目立ち、未定稿の域を脱しない」(二三頁)とある。

(5) 福田氏が、大宝元年の積奠以後「記録の上では天平二年(略中)の積奠まで約三十年間記事がない。(略中)この数字は記録上のことで実際には積奠の儀が行なわれていたのであろう。」(二〇頁論文)と述べてゐるのは、慶雲二年(伝家)の記事を見落してをり、誤まりである。弥永論文を見てゐながらの判断にしては、実に不可解・不審である。

(6) 久木氏は私信で「拙著に対する適切なる御批判の程拝謝致次第に御座候」(原文のまま、消印昭和五十年二月十一日)、「大学寮覚書」で「とくに台藏氏は史料の見落しを指摘されたもので、全く承服される指摘である」(二〇三頁)と、筆者の久木説批判を首肯され、最初に学界に紹介。「講座日本教育史」(巻五)では「七経輪転については台藏明が平安末までの実態を追求している。」(三三四頁)と紹介された。

その後、『日本古代学校の研究』で「七経輪転の初出史料や：表作成のための史料のうち旧著で見落していたものについては、台藏明(略中)の指摘に従つて訂正した。」(二〇八頁)と述べ、旧著『大学寮と古代儒教』を改訂、『日本古代学校の研究』を上梓して訂正の労を果された。因みに、前稿で用ゐた『大学寮と古代儒教』は、同書の存在は承知してゐたが大学附属図書館に所藏してをらず、所先生が御所藏の同書をお貸し下さり、数日間拝借して必要部分をノートに筆写した。当時は複写機が出回り始めた頃で、紙面がグレー色で文字が判読し難かつた(印刷代も高価であつた。その為、)遠隔複写(不常に複写なぞ出来なかつた。)（インターネット）などあらゆる筈も無く、史資料蒐集は苦勞であつた。が筆写の御蔭で、一文字々々々が頭に入り、問題点の整理が出来た。所先生がお貸し下さらなかつたなら、否御所藏で無かつたなら、前稿は成立してはゐなかつた。その事は、今に至る迄強く感謝申し上げべき事柄である。

(7) 上代学制研究の大先達の桃裕行氏が、弥永氏と並べて「参考さるべきである。」と評価されたことは、学窓出立て見ず知らず

平安朝後期記録に現れたる「積奠詩題」を論じて「七経輪転」「行事曆注」に及ぶ(臺藏)

の未熟拙劣な若造の論考に寄せられた言葉として、余りある過褒である。(前稿で、桃氏は七経輪転に就いて、恐らく)

桃氏は立正大学大学院の演習で『三代実録』を講ぜられ(三代実録係年史料集成 小山田和、講筵に列せられた小山田氏より「七経輪転については桃裕行先生ともども学ばせていただいております」と、『日本古代・中世史論集』(史正会創立十周年記 昭和五十五年刊) 購入時、「史正会」事務葉書(原文まま、消印、昭和五十五年十月十六日)で知らされた。桃氏が七経輪転に就いての知見を発表されることを、期待したが果されなかつた(同氏著作集、「上代学制の研究」、『桃裕行著作集の完』(結にあたり) 小山田和夫氏執筆、四九五―四九六頁)。

『上代学制の研究』(復)は、昭和五十八年の正倉院展の帰路、京都四条河原町の大型書店に立寄つた折、棚に並んだ沢山の本の中に見付け、手に取つて拾読をしてゐた時前述の言葉に出会ひ驚き購入(復刊されてゐることを知らず、喉から手が出る程に待ち望んでゐた書。で、その言葉があらうとならうと、最初から購入する気であつた。)列車の中で夢中になつて読んだ。その日の情景が今だに目に浮ぶ(卒業論文、前稿作成時は、神宮文庫所蔵の)同書を筆写したノートを利用している。

口序に、筆者の奈良国立博物館開催の正倉院展行は昭和四十四年に始まり、当所は田中先生の令義解・続日本紀受講に資する為、正倉院文書が第一であつたが、所謂正倉院宝物にも魅了され、毎年十一月三日前後の恒例行事となり、昭和天皇八十歳の賀を祝して東京国立博物館開催となつた五十六年を除き、平成十三年迄都合三十二回に及んだ。正倉院本体も、宝物展覧に合はせて公開され、二度拝観した(巨大さにビックリ)。

(8) 弥永論文より先、筆者は昭和四十六年度の所先生の『西宮記』演習報告者として、貞観と仁和期の七経輪転に就いて、川口・久木両説の再検討を試みた。その際に『西宮記』に「七経輪転」とあるが故を以て、「七経輪転」と学術用語を使用してゐる。その節の再検討内容を骨子として、前稿の一部に反映させた。

(9) 大学で使用される経書は、学令に

凡教授正業。周易鄭玄。王弼注。尚書孔安国。鄭玄注。三礼毛詩。鄭玄注。左傳服虔。杜預注。孝經孔安国。鄭玄注。論語鄭玄。何晏注。

(新訂増補國史大系(一) 令義解「三〇頁」)と定められてゐる。然るに貞観二年十月十六日に、孝経は従来使用の孔伝・鄭玄注には疑義が多いから、玄宗

が撰した『御注孝経』を以て教授せよとの詔勅が下された（三代表録、同日条、五五頁、株秀）。積奠では貞観四年秋・元慶八年春に『御注孝経』（三代、実録）、康和五年秋に『古文孝経』（本朝、世紀）が講ぜられ、他にも『古文尙書』が元慶六年春・仁和元年秋（三代、実録）、天慶五年春（江家、次第）に講ぜられてゐる。

(10) 第一・二・三表に用ゐた史料の略称号は、辻善之助編、『大日本年表』の、「引用書名略称索引」に做つたもので、そこに無いものは類似するものに做つて付けた。同索引は二六頁に渡つて、約二千九百に及ぶ史料に略称を付したもので、神武天皇紀元々年より弘化三年迄の事項の出典表示に使用された。後進の見做ふべき大いに活用されるべき、一大財産である。理科系の元素記号の様に、一々断はらなくても使用出来る様になれば、手間が省かれるのであるが……。

(11) 承保四年秋、諸司不具の為宴席が停止されてゐる（年中行事抄、群書類、従、公事部、四八九頁）。承暦年間に、学生が欠席した為、論義が中止された（祝奠次第、群書類、従、公事部、三八頁）。

寛治六年二月十四日の積奠には、源経信・大江匡房、藤原為房・藤原成宗等、作詩に堪能な官人が参加してゐたにも拘らず、献詩が行はれなかつた。そのことを『中右記』は「十四日卯丁大學寮釋奠、（略）而皆属文之人也、不_レ被_レ獻_レ詩如何、前々皆雖_二上卿_一所_レ被_レ獻也」（同書一、同日、日条七二頁）と記してをり、久木氏が指摘されてゐる（天学寮と古代儒教、二二二頁、日本古代学校の研究、三四頁）。また『中右記』寛治八年八月八日条に、「凡近代釋奠儀、皆是雨儀也、」（同書一、同日、日条一七二頁）とあり、積奠儀式は略式化されてゐる。

(12) 保安三年秋の積奠は、廟堂の頽危に依り南廳座で行はれ（百鍊抄、同年八、月一日条、五三頁）、大治四年秋は廳屋破損の為、廟堂前の東屋を以て廳屋とし、廟拜は無く『尙書』が講ぜられた（中右記、六、同年八、月二日条、一〇頁）。

久安元年は算博士不参の為、算道論義が中止された（祝奠次第、群書類、従、公事部、三八頁）。仁平三年秋は、積奠晴儀が行はれた（白記、一、同年八、月八日条、九七頁）。

(13) 治承二年春は『古今著聞集』に、「後徳大寺左大臣（略）治承二年の春釋奠に参りて。豈圖再接杏壇宴。衣鉢遂歸四十春と作り給ひたるを。永範卿感歎にたへず。なみだをながしたり。おほかた風月の才人にすぐれたるにや。」（新訂増補国史大系、同書、七五頁、竹居明男氏「古今著聞集」研究二四、平成三年）とある。治承四年秋は、天皇が福原に移御され、官人・文人は少なく、直講清原近業が参入して講論が行

平安朝後期記録に現れたる「積奠詩題」を論じて「七経輪転」「行事曆注」に及ぶ（臺藏）

はれた（山槐記 同年八月、七日条）二頁。

(14) 大学寮焼亡後、安元三年七月十八・二十八日と再建に就いての論義が開かれたが、再建されず太政官庁で行はれることになつた。治承元年（八月四日改元）八月十日、正庁を廟堂、西庁を都堂として行はれた（玉葉、安元三年七月十八日条、八七頁。二十八日条、八九頁。八月十日条、九四頁。八月二十五日条、九七頁。翠川氏「積奠四」川村短期大学研究紀要）。

(15)、『百鍊抄』大治二年八月十日条に「依_レ致生禁斷。不_レ供_二童腥之類_一」（五七）。寿永二年八月五日条に「不_レ供_二童腥_一。僅備_二青菜之類_一」（二頁）とあり、積奠供物にも変化が生じた。供物の三牲に就いては、戸川点氏「積奠の三牲」（社_レ所収、平成七年刊）がある。

（追記、三牲に関して、中野昌子氏に、「衛府と積奠」〔京都市史編さん通信 二五〕七、平成六年、「積奠三牲奉供をめぐって」〔史念 一五三、平成八年〕がある。）

また、積奠が続いてゐることも重要である。延暦十二年より保安迄続いてゐた相撲節が、三十年余停止せられ保元三年再興。その後は承安四年に行はれたのみで廃絶してゐる（國史大辭典 八、一四一頁。大日本年表 二二三七頁。日本史総合年表 一八五頁）に「相撲節ノ復活」とある。ことを考へ併せれば理解されよう。

(16) 作成中の「上代積奠事例年表（稿）」（仮称、大宝元年）は、卒業論文に附した「積奠実施年表」（大宝元年、建久六年、学部での受講の際や、さうでもない時も、常に持参して下書きを進めてゐた。その頃の辛苦は、今以て懐かしく思ひ出される。）を、改訂増補したもので、我が学令積奠条に「凡_レ大学国学、毎_レ年_レ春_レ秋_レ二_レ仲_レ之_レ月_レ上_レ丁_レ、積奠於_二先聖孔宣父_一」（とある）とある。この条部に着目して、『続日本紀』以降の各時期の記録から積奠記事を拾ひ出し、○×↓△■等の記号を用ゐて、仲春・仲秋と上丁・中丁・下丁に仕切つて、文字で表した翠川年表では無く、言ふなれば図画化し実施状況が把握し易いものとしたのである。只、卒業論文のものは青と赤の色エンピツを使用して、実例と推定とを区別したが、今回は其が叶はず推定は一部分のみを表示した。そして日附・依拠史料は言ふ迄も無く、講書・積奠詩題を明記し、備考欄には史料記事を摘記する等把握出来るものとしたのである。誤まりは、今後多くの人々の手に依つて訂正され、より完成されたものに育て、行つてもらひたい。その意味で、本年表が試金石となり、悉皆調査を目指す一階梯となるならば、筆者（編）の大きな喜びとする所である（同年表の発想は、学部三年時の「積奠と六国史」年表に発す。）。

(17) 積奠事例には、実施・停止・延引等と諸祭（諸公事）との関係があり、殊に二月の積奠では諸祭との関係も多く、その中には積奠実施に抵触するものもあり、それらとの関わりに就いて実例を探求する必要がある。代表的な事例だけでも呈示して考究する所存である。また諒闇や穢との関わりに就いても、公事の在り様面から調査してみたい。大学卒業時には、平安朝の諸公事の主要なものを撰んで、暦の上に記して長期間を一覧出来るものを作成する気であったが、早や古稀の坂を越へ、わづかに積奠だけを年表化したに過ぎない。古人言へらく、「日暮れて、道の遠し」と。老いを慨歎すること頻なり。只、積奠研究の初期に際会し、學術用語「七経輪転」誕生の場に居合はし、用語の取り上げ者となることが出来たことは、乏しい研究の中にも、一筋の光明となつてゐる。正しく文字通り有難いことである。

※ この様な論考を、もつと早くに執筆すべきであったが、未刊史料の発刊を待つことが多く、前稿発表後に刊行されたものに就いては、その都度増補して来たとは言へ、稿了に漕ぎ着けたとは言ふもの、矢張多くの未刊史料がある。しかし、筆者の遅筆に合せて、それらの刊行を待つ訳には行かぬ。また不幸寡聞にして、刊行を知らない書物もある。自分自身としては、不承々々ながらもこゝに目処を付けることにして、四十六年間の思ひを込めて執筆した。それを諒恕されたい。(田中卓先生の(月命日の日に))

令和元年五月二十四日初稿

令和三年五月二十四日補稿

※ 本論及び補注に於いて用ゐた圈点・傍点・傍線は、全て筆者の付したものである。

追記、原稿投稿後、近刊の『大日本史料』第三編之三十九(令和二年九月刊)所載の『中右記部類』保安三年八月二日条の裏書に、

釋奠

春秋同、但秋次日明經博士夢内、講書、孝・禮・詩・書・論・易・傳、次第講之

とある(頁七九)ことを承知した。三九頁に追加して置く。(R三、十二、五)自余の追記は(R四、九、五)

(だいぞう あきら・人文学会々員)

平安朝後期記録に現れたる「積奠詩題」を論じて「七経輪転」「行事曆注」に及ぶ(臺藏)